

「道徳感情論」と「国富論」を合わせて読むことで、「国富論」にあるスミスの経済観を裏付ける社会思想の全体像が見えてくる。

富は消費される生産物の量であり、生産過程での分業が生産物の量を増やす。やがて、職業による分化が可能になり、さらに社会の総生産量が増加する。分業は、生産者が利潤を高めようと、労働者が収入を高めようと、消費者が満足

危機・先人に学ぶ アダム・スミス

互恵もたらす市場

やさしい経済学

を高めようとする行為から生じてくる。

「われわれが食事を期待するのは、肉屋や酒屋やパン屋の慈悲心からではなく、彼ら自身の利害関心からである。われわれが呼びかけるのは、彼らの人類愛にたいしてではなく、自愛心にたいしてであり、われわれが彼らに語るのは、わ

れわれ自身の必要についてではなく、彼らの利益についてである」（「国富論」水田洋監訳）

たとえ利己的な行為から生まれる競争であっても、その行為が、自己の想像する公平な観察者が同感できる範囲を超えないものならば、競争は健全な動機づけとなり、社会の利益を高め

ることになるだろう。

だが、市場を成り立たせるルールが不十分であれば市場の質は低くなる。不正義も可能となり、思いもよらぬ被害を受ける人が出てくるだろう。スミスは「道徳感情論」で、不正の処罰の正当性は疑いのない真実であるとささ述べている。個

京都大学名誉教授 西村 和雄

々の主体が自律的に行動しながら相互に関連する。個々が競争的に行動しても、意図せずして、社会の利益が高まり全員を利することになる。市場メカニズムが互恵を可能にする。経済を過剰なルールで規制するならば、市場の質は低くなり、本来の働きが阻害され社会的利益が損なわれる。特定の集団を利することになり、多くの人の利益が失われる。過剰な規制が

成長率を抑えるということも定説化している。

競争を排し法によって国民を指導する政策が主流の日本では、スミスの思想から学ぶべきことは多い。筆者の所属する京都大学で進める複雑系、市場の質、教育経済学、汚職と成長という研究も、源流はアダム・スミスにあると言っても言い過ぎではなからう。（「危機・先人に学ぶ」の連載は今回で終わります）